

## 諏訪地方の温泉

諏訪市役所 稲垣 益次

諏訪地方には上諏訪・下諏訪・蓼科の著名な温泉があるが、このほかにもいくつかの温泉があり、それぞれ地域の人々に親しまれている。ここでは、調査資料の多い上諏訪温泉を主に、他の今まであまり紹介される機会がなかった温泉についてもふれたい。(第1図)

### 1. 砥川沿いの酸性泉

砥川は和田峠周辺から諏訪湖にそそぐ川で、流域の大部分は下諏訪町に属する。温泉は下諏訪町の市街地をぬけた右岸にあり、江戸時代から“毒沢”として知られている小さな谷に湧出している冷たい酸性泉で、附近の岩石は強い変質作用を受け、植物も全くなく、荒れ果てた地貌を呈する。このような地形地質は砥川沿いのところどころに見ることができるが、いずれも硫気や温泉によるものであろう。毒沢のNNW約1km、尾根をへだてた福沢川の右岸に渋の湯がある。これも冷たい酸性泉で、1962年ころまで湯治場に利用されていたが現在は廃業しており、全く利用されていない。このほか、日本鉱泉誌に“一里塚鉱泉”がのっている。これも砥川流域の筈であるが、現在は位置が不明である。分析表は第1表に示した。

### 2. 下諏訪温泉

下諏訪町は江戸時代まで中山道と甲州街道の分岐点にあると同時に、中山道の難関、和田峠をひかえていた重要な宿場町であった。旅人は和田峠の険阻な道を登るのにそなえたり、あるいは峠越えに疲れた身体をいやすために温泉入浴をした。明治初期までは子湯(現在児湯)、綿の湯、且過の湯の三湯があり、その湧出状態は現在に至るまで殆んど変わっていない。今では以上の三湯のほかにもいくつかの温泉が掘さくされている。これらは諏訪神社下下社秋宮の周辺に分布しているものが多く、湖畔にある温泉は上諏訪 泉の分布域につながっている。下諏訪温泉の分布は第2図、成分は第2表に示した。

### 3. 上諏訪温泉

諏訪湖東岸の平坦な地域、諏訪市の市街部が温泉湧出地帯である。北は下諏訪町の高木、高浜両温泉につながっている。温泉湧出地帯は高木、高浜を除いてNNW—SSEに約3.3km、巾は最も広いところで約800mにわたっている。(第3図)。湖の中にも分布上湧出地帯に含まれるが1950年ころまでのような湖中への自噴はないようである。1920年ころまでは、湧出地帯の大半は湖中か水田地帯であり、利用されていた温泉は僅かなものだった。第3表に代表的な温泉の成分表をのせた。

#### (1) 温泉分布

第4図に示したのは1929年と1958年の温泉分布である。この約30年間の温度分布は、湖畔に温

泉が増えたこと、ボーリングの深さが増したこと、等のため、地下構造が、より一層明らかになったものである。1929年当時からの高温帯は諏訪盆地の東縁に見られる断層線の方角(NNW-SSE)に一致しており、熱源供給の割れ目の存在を示していると考えられていたのであるが、1958年の分布はこの考え方を一層強く支持しているように見える。80℃以上の高温帯がNNW-SSEの一直線状に長くのびていることが1958年の分布の特長である。

## (2) 化学成分の分布

第5図にNa<sup>+</sup>、4.3アルカリ度の分布を示す。Naは温度分布と良く似た形をしている。Clも同様な分布を示す。一方アルカリ度は西に向かって増加しておりガス田の天然ガス附随水につながっている。KMnO<sub>4</sub>消費量、K、Mgなども同様な分布を示す。

## (3) 化学成分の経年変化

個々の温泉について経続測定をしてみると、温度、化学成分の変化が殆んどないもの、変化の大きなもの、等があることがわかる。変化の大きなものは、殆んど、低温化、Na、Cl等の温泉成分の減少等であり、又、KMnO<sub>4</sub>消費量やK、Mgの増加しているものも多い。その例を第6図に示す。(a)は旧甲州街道沿いの湯之脇地区の旅籠だった家の温泉で、期間中変化が少ない。(b)は並木通りの端にある旅館の温泉で、測定をはじめた当時65℃くらいの温度があったものが、期間中に約10℃の低下があり、Clも減少し、アルカリ度は増加している。

## (4) 湧出量の変化

上諏訪温泉の湧出量の測定は1926年から1960年まで上諏訪町青年会(後には小和田青年会)の牛で毎年1~2回実施されていた。それ以後は毎年1回県に提出する温泉現況報告書によって集計されている。第7図に5年毎の湧出口数、動力装置口数、湧出量を示してある。1958年には自噴泉はなくなり、すべての温泉がポンプアップされるようになった。1920年~25年に動力装置数が減少しているが、これは太平洋戦争中と戦後に電力使用制限が行なわれた結果である。

自噴温泉の経年変化を第8図に示した。これは毎日定時刻に測定したものを月平均であらわしてある。冬は少なく、夏に多いのは降水量に関係があるのかもしれないが、この当時、大半の温泉は動力揚湯しており、需用の多い冬期間に大量の揚湯があったため、自噴泉に影響があったものかもしれない。

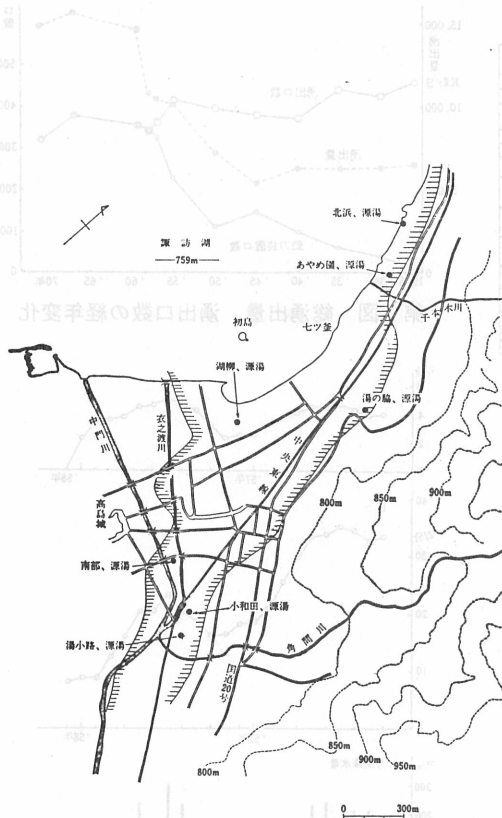
## (5) 地下温度の分布

温泉掘さくが上総掘によりさかに行なわれていた当時測定された孔底温度の資料をまとめ、地下の温度分布を得ることができた。その断面図を第8図に示す。東側の山麓に近いところでは比較的浅いところでも熱く、西側ほど熱いところが深くなる。又、北側ほど熱いところは深く、南側では浅い。又、上総掘の資料から地質断面図が得られた。(第9図)この図は第8図と良く似ており、温度が地質とかがわりをもっていることが良くわかる。即ち温泉は凝灰角礫岩層に沿って分布しているようである。

## (6) 地質について

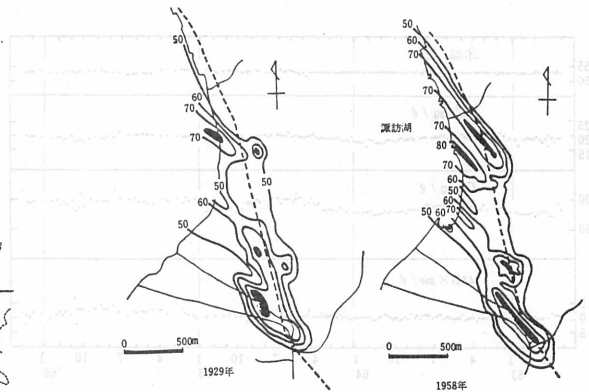
上総掘による掘さくが行なわれていた当時は、凝灰角礫岩層あるいは諏訪湖堆積物である砂利層に到達すると掘さく不能となったり、又200mくらいの深度が上総掘の限度になるため、それより深い場所の地質は不明であった。それで、温泉は凝灰角礫岩を含む塩嶺岩層が熱源となって



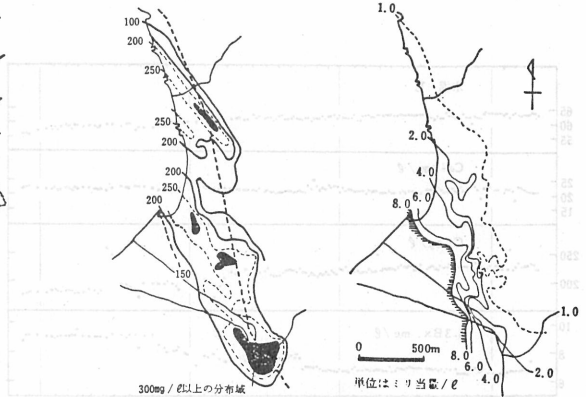


第3図 上諏訪温泉の分布

上諏訪温泉の湧出口は、数が多いので、湧出範囲を////印で示してある。  
●印……諏訪市総合温泉源湯の掘きく地点。(1981年)



第4図 1929年と1958年の温度分布



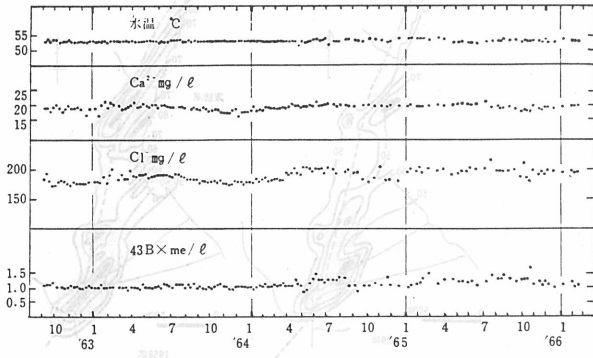
第5図 ナトリウム(Na+) アルカリ度(4.3Bx)の分布

第3表 諏訪市総合温泉源湯(深部熱水)の化学成分

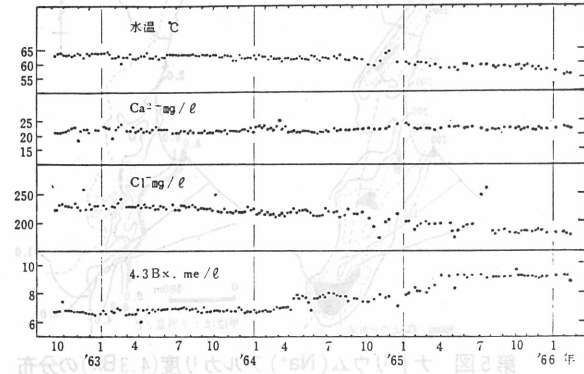
番号	採水年月日	源湯名称	ポンプ室温 °C	泉温 °C	pH	Na+ mg/l	K+ mg/l	Ca <sup>2+</sup> mg/l	Mg <sup>2+</sup> mg/l	Cl- mg/l	F- mg/l	SO <sub>4</sub> <sup>2-</sup> mg/l	HCO <sub>3</sub> <sup>-</sup> mg/l	電気伝導度 μS/cm
1	1980.8.4	北浜	25.7 (屋外)	67.5	8.4	194	9.9	15.2	0.3	136.0	1.0	73.6		680
2	1981.2.17	あやめ園		93.5	8.5	338.6	19.1	25.0	0.08	393.0	3.56	195.6	61.0	1210
3	1980.8.4	湯の脇		35.5	67.0	8.2	280	9.5	20.8	1.2	189.0	1.5	78.7	880
4	ク	湖柳		35.0	86.0	8.2	370	10.7	46.5	0.2	282.4	1.6	152.3	1440
5	ク	南部		42.0	84.0	8.5	326	9.7	26.4	0.1	277.2	3.0	140.1	1180
6	ク	小和田		29.5	77.5	8.4	386	8.1	19.2	0.3	290.6	1.8	145.1	1180
7	ク	湯小路		33.5	77.0	8.6	360	10.0	13.6	0.9	252.6	1.9	60.7	1100

- 北浜：深度400mボーリング、揚水水位10m、ポンプアップ、湯量減少傾向、湯を送っている範囲は銀別～精工舎大和の寮、三ツ釜は現在休止している。
- あやめ園：深度500mボーリング、自噴量2800l/分。七ツ釜源泉へ引湯し、ここから市内へ給湯。
- 湯の脇：400mボーリング・ポンプアップ室に計測盤はない。貯湯槽泉温66.0°C、貯湯槽水位約1.6m(送りだし・リターン流量)
- 湖柳：400mボーリング、ポンプアップ、ボーリングをした当時(5年程前)最高温度91～92°Cであった。
- 南部：400mボーリング、ポンプアップ、水位計がある。
- 小和田：400mボーリング、ポンプアップ、モーター能力1000M<sup>3</sup>/m揚水量は最も多く四賀、尾玉団地方面へ。
- 湯小路：350mボーリング、ポンプアップ、モーター能力1000M<sup>3</sup>/m平常は500M<sup>3</sup>/m

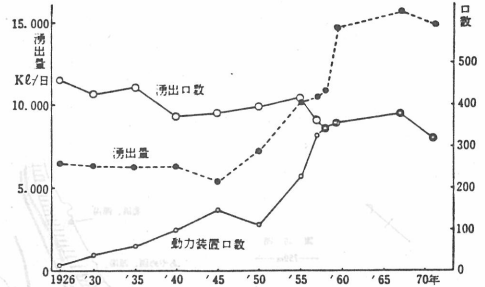
(1) 面積の許代数値不誤 図2 表



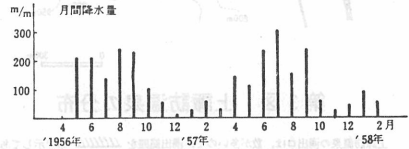
第6-a図 温度・化学成分の経年変化



第6-b図 温度・化学成分の経年変化

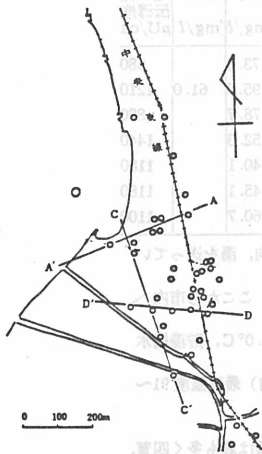


第7図 総湧出量、湧出口数の経年変化

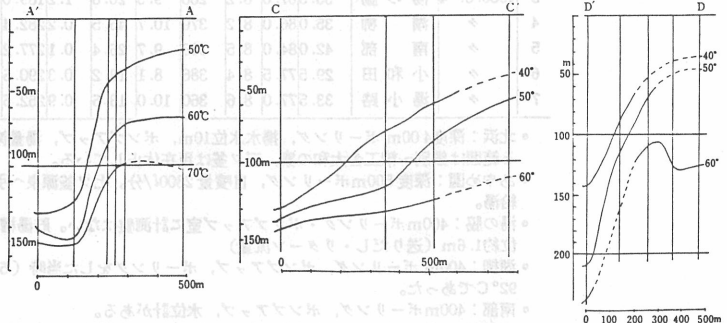


第8図 湧出量の経年変化

A: 湖岸通り三丁目の当時諏訪市所有のもので、未利用だったもの。  
B: 大手二丁目の民家の温泉である。



地下温度測点の分布



第9図 地下温度分布の断面 (1)

いる、と考えられたのである。その後、ロータリーボーリングが行なわれるようになり、地下の様子が良くわかってきた。第10図は下諏訪町との境界に近い場所で掘さくした温泉の柱状図である。石英閃緑岩が283 mから出てくる。又、温泉は安山岩層にあること、石英閃緑岩の中にも温泉があること、等がわかる。このことから上諏訪温泉もこれより北に分布する下諏訪、浅間、戸倉一上山田、山の内等の長野県の主要な温泉帯に属することがわかった。その後、400 mをこす深い井戸が掘さくされ、いずれも300 mくらいの深さで石英閃緑岩があらわれた。(第11図)

#### 4. 盆地中部の温泉

諏訪盆地内にもいくつかの温泉がある。入浴や家事、農事(粃の発芽)などに利用されていた。これらの温泉群は分布上、上諏訪から下諏訪につながっているが、規模が小さく、上諏訪や下諏訪温泉の陰にかくれた存在であるが、神宮寺温泉は諏訪大社にまつわる温泉伝説の舞台として有名である。

##### (1) 福島・下金子の温泉

上川にかかる鷹の橋を南西に向う県道から少し北に入ったところに福島新町の温泉があり、更に県道沿いに南西方向にいくつかの低温泉が並んでいる。いずれも湧出量は少なく、50~2ℓ/分くらいのものである。その成分表を第4表に、温度分布を第13図に示した。温泉分布そのものが道路沿いに限られるため、横方向がどうなっているかわからないが、46℃を最高にして両側に低くなっている。他の成分も同様な傾向を示し、上諏訪温泉ではMg、アルカリ度等は西側のガス水に多いのに、ここでは温度に比例するようである。

##### (2) 神宮寺温泉 (第5表, 第14図)

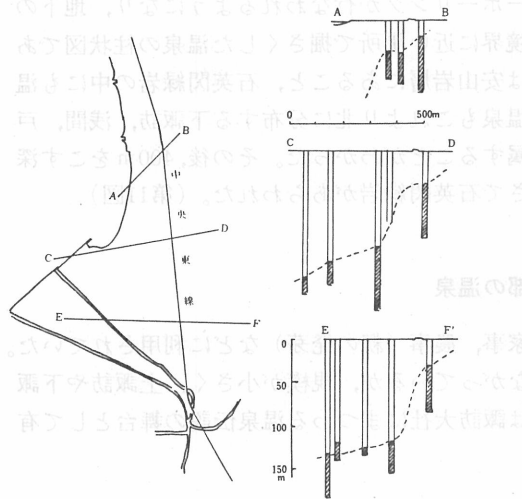
諏訪神社上社本宮の周辺に古くから26~28℃の低温泉が知られていた。湯治場を兼ねた公衆浴場が一軒あり、他は洗濯などの家事に用いられ、水田の中や道路端に共同洗濯場が二ヶ所ある。温度やアルカリ度分布を第15図に示す。最も温度も高く、成分も多いNo.9地点に1967年に掘さくを行なった結果150 mの深さで、温度57℃、自噴量100ℓ/分の温泉の湧出があり、その後2ヶ所と同じ深さの掘さくが行なわれ、同温度、同量の自噴量の温泉が得られている。

##### (3) 飯島・赤沼温泉

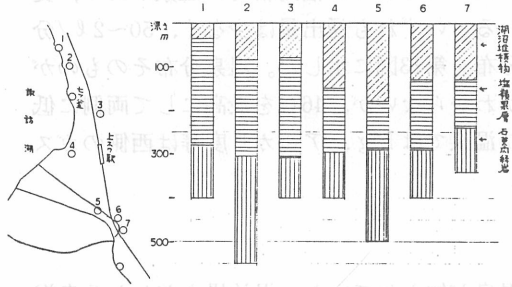
神宮寺一下金子—福島—上諏訪へと温泉群が繋がっているが、この飯島・赤沼温泉は少し南にはずれた位置にある。(第1図)ここでは源泉数は3本だけで、いずれも各地区の共同浴場に利用されている。成分は第6表に示した。

#### 5. 上原温泉

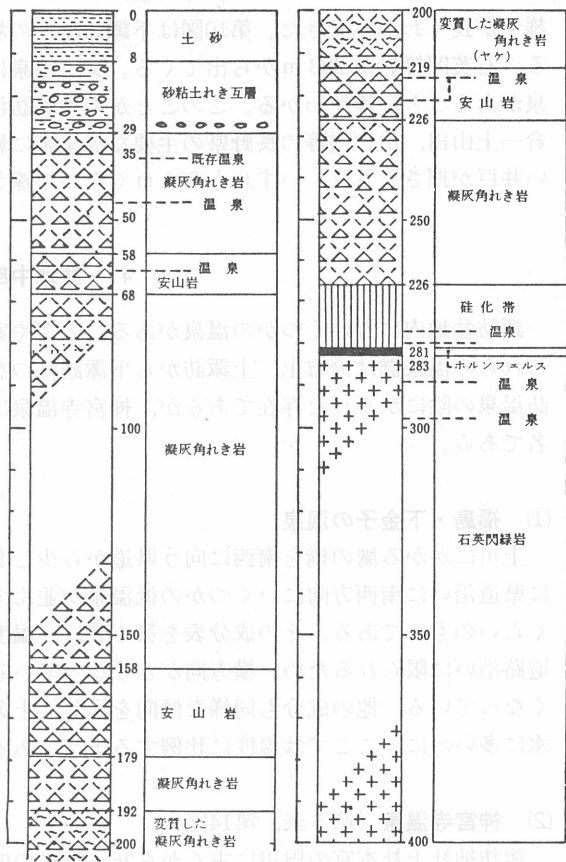
茅野市上原地籍の葛井神社の北約400 mの上川河川敷内にぬるい湯がでており、夏の間は野天風呂として利用されてきたという。現在でもその浴槽跡が残っており、地域の人々は深く掘れば温泉が出る。と考えていた。1972年、附近の地下水調査を行ない、見込みのあることがわかったので、深さ150 mの掘さくを行ない、温度44.5℃(1976年に40℃、1981年に38.2℃に低下)の温泉が湧出したが量も少なく、地区の人々が共同浴場に利用しているだけである。第2号井は1974年に掘さくされたが、450 mの孔底温度は52.5℃あったものの揚水すると15~20℃となり、利用さ



第10図 地質断面図



第12図



第11図 北浜温泉の地質柱状図

第4表 福島・下金子井戸水化学成分

番号	水	温	湧出量	pH	導電率	Ca <sup>2+</sup>	Mg <sup>2+</sup>	全Fe	Si(*1)	Cl <sup>-</sup>	4.3BxI	P(*1)
		度	l/分		μS/cm	mg/l	mg/l	mg/l	mg/l	mg/l	me/l	mg/l
1	36.5			7.2	590	25	15	0.18	36.1	82.6	11.2	0.28
2	46.2			6.6	930	33	16	0.09	40.7	208	6.7	0.18
3	30.9	13.6		7.1	250	2.9	1.1	0.56	35.4	20.4	3.7	0.30
4	22.2	4.5		7.2	250	2.6	0.6	0.24	32.1	17.1	3.6	0.29
5	22.2	4.0		7.2	250	1.6	1.2	0.18	30.7	15.8	3.3	0.26
6	21.5	3.5		7.1	260	2.9	1.9	0.28	31.0	22.1	4.0	0.27
7	20.9	8.2		7.3	240	2.4	0.8	0.22	29.8	14.9	3.2	0.24
8	18.8	5.4		7.1	210	1.4	0.9	0.21	27.9	13.8	3.3	0.22
9	17.3	2.5		7.1	220	1.2	1.3	0.32	26.9	13.0	3.6	0.25
10	16.9	5.6		7.3	180	1.1	0.9	0.16	23.8	12.3	2.6	0.26

※1 モリブデン酸アンモニウムによる比色

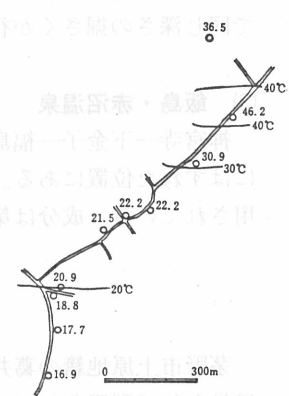
※2 pH4.3アルカリ度

番号は分布図の番号

1969-IV-12採水



第13-a図 福島・下金子地区の井戸分布



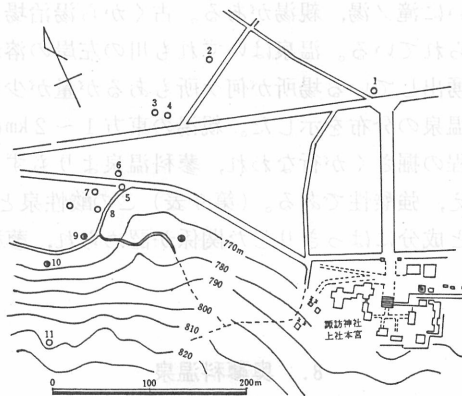
第13-b図 福島・下金子の温度分布

第5表 神宮寺温泉の化学成分

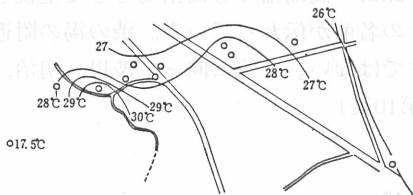
番号	水温 °C	湧出量 l/分	pH	導電率 μS/cm	総硬度 CaCO <sub>3</sub> mg/l	Ca <sup>2+</sup> mg/l	Mg <sup>2+</sup> mg/l	Na <sup>+</sup> mg/l	Cl <sup>-</sup> mg/l	SO <sub>4</sub> <sup>2-</sup> mg/l	F mg/l	4.3Bx me/l
1	26.0	27	7.4	320	29.5	5.9	3.6	55	62.5	20	1.9	1.5
2	26.7	43	7.7	300	24.8	5.0	2.9	58	70.2	17	2.1	1.35
3	28.2	96	7.8	280	24.2	4.8	3.2	58	71.0		2.3	1.42
4	19.3	微量	6.9	290	28.2	5.8	3.3	62	70.2	6	2.2	1.90
5	27.7	38	7.8	290	25.4	5.2	3.0	62	69.5	14	2.2	1.44
6	27.3	13	7.7	280	25.8	5.2	3.1	61	71.7	17	2.1	1.42
7	27.3	156	7.8	280	25.8	5.5	2.9	61	71.7	21	2.1	1.37
8	27.3	5	7.8	300	28.0	5.9	3.2	66	79.5	19	1.9	1.39
9	30.7	微量	8.4	990	45.7	17.8	0.3	393	498	87	3.1	0.75
10	28.0	不明	7.4	450	45.3	16.6	0.9	97	181	53	1.4	0.81
11	17.5	不明	6.4	90	27.5	8.9	1.3	4.6	3.0	14	0.3	0.53

番号は分布図の番号。

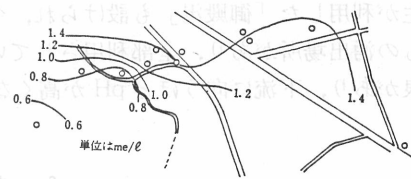
1965年8月5日採水



第14図 神宮寺温泉の分布



第15-a図 神宮寺温泉の温度分布



第15-b図 神宮寺温泉のアルカリ度分布

第6表 飯島・赤沼温泉の化学成分 (上諏訪温泉調査報告書1960)

	採水日 1958年	水温 °C	pH	導電率 μS/cm	K <sup>+</sup> mg/l	Na <sup>+</sup> mg/l	Ca <sup>2+</sup> mg/l	Mg <sup>2+</sup> mg/l	Zn <sup>2+</sup> μg/cm	Cl <sup>-</sup> mg/l
飯島	12-12	42.0	7.2	1360	14.9	157	20	11	2	229
上赤沼	〃	38.0	6.8	810	16.1	126	14	9	6	157
下赤沼	〃	42.0	6.7	1330	16.5	132	24	13	12	234
分析者				W	O	O	U	U	I	U
	SO <sub>4</sub> <sup>2-</sup> mg/l	H <sub>2</sub> S mg/l	HBO <sub>2</sub> mg/l	F <sup>-</sup> mg/l	Br <sup>-</sup> mg/l	I <sup>-</sup> mg/l	アルカリ度 me/l	KMnO <sub>4</sub> 消費量 mg/l		
飯島	11	0.0	2.0	1.17	0.68	0.05	2.78	15.2		
上赤沼	20	0.0	1.6	1.50	0.46	0.03	1.93	12.0		
下赤沼	12	0.0	1.6	1.12	0.70	0.04	2.39	11.2		
分析者	U	U	U	T	U	U	U	U		

I: 一岡雅己 O: 小坂文子 T: 高橋保夫 U: 上野精一 W: 綿抜邦彦



れていない。(第16図, 第7表)

### 6. 塩壺温泉

茅野市米沢の塩沢地区に古くから塩壺(ジョツボ)温泉が知られている。昔は公衆浴場に利用されていたが、今は茅野市老人福祉センターの浴用に利用されている。水温は25~26℃であるが化学成分は比較的多い。周辺の地下水もこの温泉の影響を受けているものがある。(第17図, 第8表)

### 7. 蓼科温泉

上川の上流の滝ノ湯川沿いに滝ノ湯, 親湯がある。古くから湯治場として発達し, 特に最近では保養地, 避暑地として知られている。温泉はいずれも川の左岸の溶岩層の下部から湧出しており, 滝ノ湯, 親湯以外にも湧出している場所が何ヶ所もあるが量が少なく, 利用されていない。第18図に蓼科温泉と奥蓼科温泉の分布を示した。親湯の東方1~2kmにある小三室, 三室に観光開発会社により深さ100m程の掘さくが行なわれ, 蓼科温泉よりもずっと高温な温泉が得られた。特に三室の温泉は90℃をこえ, 強酸性である。(第9表)この酸性泉と親湯, 滝ノ湯をくらべると, 第19図のようになる。温泉と成分にはっきりした関係が認められ, 蓼科温泉の源は三室附近にあると考えることができる。

### 8. 奥蓼科温泉

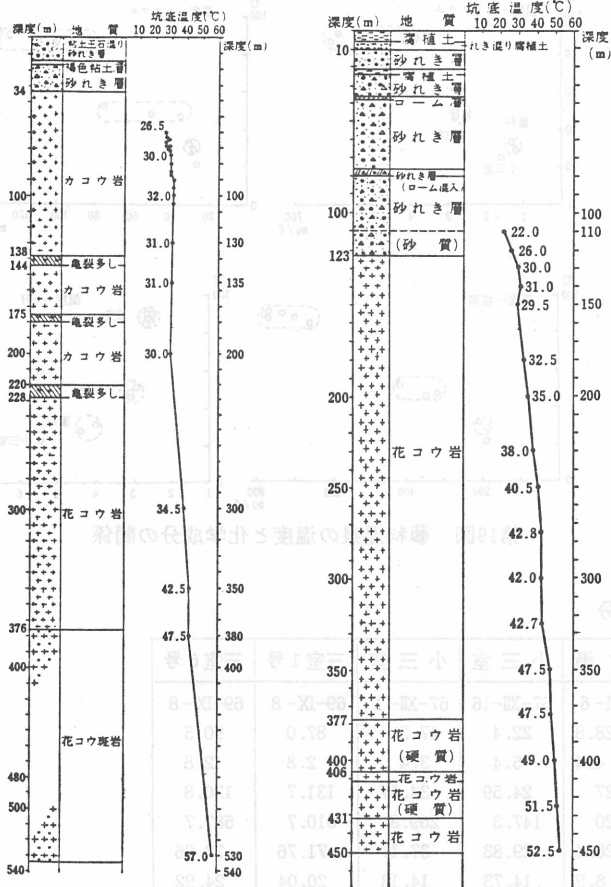
蓼科温泉の南, 渋川沿いにもいくつかの温泉があり, これらは総称で奥蓼科温泉と云っている。江戸時代の記録では「渋之湯」に関するものが多く, 諏訪の高島藩でも湯治場として重視していた。藩主が利用した「御殿湯」も設けられ, 今でもその名前が伝わっている。渋の湯の付近にはいくつもの湧出場所があり, 全部利用されているわけではない。下流に向って渋川, 明治, 横谷の各温泉があり, 下流に向うほどpHが高くなる。(第10表)

### 9. むすび

以上, 諏訪地方の温泉の概要について述べたが, これら以外にもまだいくつかの「温泉」とか「鉱泉」と呼ばれているものがある。いずれも低温で, 成分も乏しいが, 地元では住民に利用され, 親しまれているが今回は省略した。諏訪地方は冬期間, 寒冷な気候となるので, 殊更温泉に親しみ, 天与の恩恵に感謝している。当地方の温泉の紹介をする機会を与えられた学会の皆様, 掛川先生に感謝申しあげる次第である。

### 文 献

諏訪教育会(1975) 諏訪の自然誌, 地質編  
 諏訪教育会(1957) 諏訪の自然誌, 陸水編  
 南英一ほか(1960) 上諏訪温泉調査報告書  
 吉村信吉, 三沢勝衛(1931) 上諏訪温泉研究 地理学評論 Vol. 7 No. 4



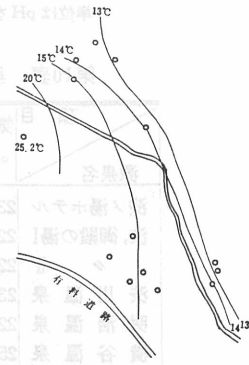
第16図 上原温泉(第1号井)のボーリングによる地質柱状図(1973) 上原温泉(第2号井)のボーリングによる地質柱状図(1974)

第7表 上原温泉の化学成分

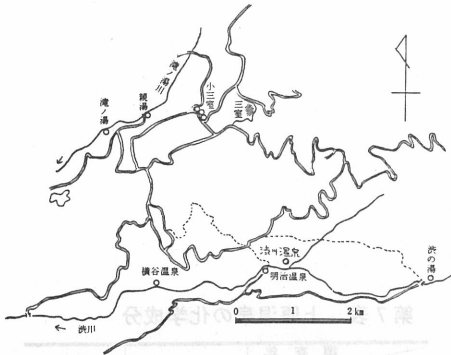
調査年		1976年3月	1981年8月
調査項目			
泉	温	40.0 °C	38.2 °C
水素イオン濃度	pH	9.4	9.1
ナトリウムイオン	Na <sup>+</sup>	220 mg/l	220 mg/l
カリウムイオン	Ka <sup>+</sup>	0.7	6.0
カルシウムイオン	Ca <sup>2+</sup>	10.3	7.2
マグネシウムイオン	Mg <sup>2+</sup>	0.04	1.0
第一鉄イオン	Fe <sup>2+</sup>	0.06	tr
塩化物イオン	Cl <sup>-</sup>	255	174
硫酸イオン	SO <sub>4</sub> <sup>2-</sup>	131.9	181.1
ヒドロ炭酸イオン	HCO <sub>3</sub> <sup>-</sup>	31.7	54.5
ヒドロ硅酸イオン	HSiO <sub>3</sub> <sup>-</sup>	11.4	
蒸発残留物		582	
測定者		長野県衛生公害研究所	陸水委員会

第8表 塩壺温泉の化学成分の変化

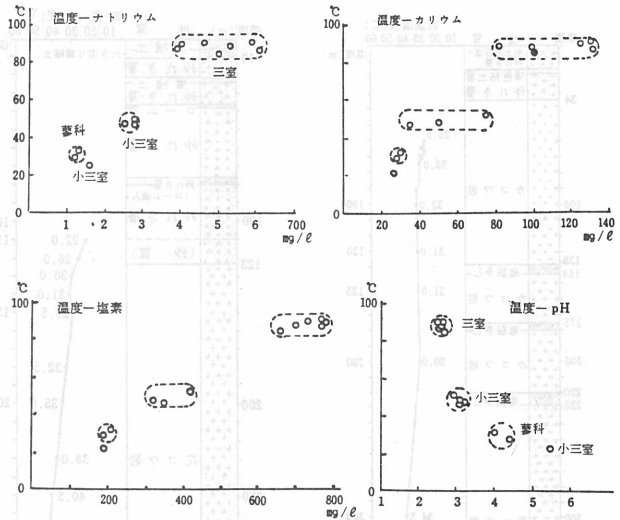
調査年	1963年12月	1966年4月	1973年10月	1981年9月
調査項目				
温度	26.0 °C		25.2 °C	26.4 °C
水素イオン濃度	pH 6.9	7.4	6.8	6.6
ナトリウムイオン	Na <sup>+</sup> 230 mg/l	250 mg/l	388 mg/l	428 mg/l
カリウムイオン	Ka <sup>+</sup> 11.7	21	37	39.0
カルシウムイオン	Ca <sup>2+</sup> 255.2	46	58	61.0
マグネシウムイオン	Mg <sup>2+</sup> 39.2	43	58	58.8
第一鉄イオン	Fe <sup>2+</sup> 0.095			tr
塩化物イオン	Cl <sup>-</sup> 85	123	176	169.8
硫酸イオン	SO <sub>4</sub> <sup>2-</sup> 553.7	332	555	408.4
ヒドロ炭酸イオン	HCO <sub>3</sub> <sup>-</sup> 755.1	467	622	615.7
ヒドロ硅酸イオン	HSiO <sub>3</sub> <sup>-</sup> 0.154	72.8		
蒸発残留物	2020	1265		
測定者	長野県衛生研究所	中央温泉研究所	稲垣 益次	陸水委員会



第17図 塩壺温泉付近の水温の分布



第18図 蓼科・奥蓼科温泉の分布



第19図 蓼科温泉の温度と化学成分の関係

第9表 蓼科温泉の化学成分

	親湯	滝ノ湯	小三室	小三室	三室1号	三室6号	
年月日	59-V-6	59-VI-6	67-XII-16	67-XII-1	69-IX-8	69-IX-8	
水温 °C	32.0	28.8	22.4	47.3	87.0	90.5	
pH	4.0	4.4	5.4	3.4	2.8	2.8	
K <sup>+</sup>	30	27	24.59	34.57	131.7	130.8	
Na <sup>+</sup>	130	120	147.3	269.8	610.7	587.7	
Ca <sup>2+</sup>	28.2	26.4	29.83	37.17	71.76	73.06	
Mg <sup>2+</sup>	8.0	8.9	14.73	14.13	20.04	24.92	
ΣFe	—	—	1.871	1.299	0.917	1.024	
Cl <sup>-</sup>	213	186	191.0	346.2	768.4	769.7	
SO <sub>4</sub> <sup>2-</sup>	177	150	165.7	286.2	869	826	
FreeCO <sub>2</sub>	27	76	85.69	40.15	176.8	171.4	
H <sub>2</sub> S	0	0		0.316	0.337		
HBO <sub>2</sub>	16	18	0.004		118.1	104.2	
	上諏訪温泉 調査報告書	同	左 長野県衛研	同	左	同	左

単位は pH をのぞき mg/l。

第10表 奥蓼科温泉の化学成分

採水：1981年8月

項目 源泉名	気温水温		液性		電気伝導度 μS/cm at 18°C	Na <sup>+</sup>	K <sup>+</sup>	Ca <sup>2+</sup>	Mg <sup>2+</sup>	Fe <sup>2+</sup> <sup>1)</sup>	SO <sub>4</sub> <sup>2-</sup>	Cl <sup>-</sup>
	°C	°C	pH	RpH		mg/l	mg/l	mg/l	mg/l	mg/l	mg/l	mg/l
滝ノ湯ホテル	23.4	27.5	2.7	2.8	1,470	73.7	15.7	20.8	6.8		153.8	108.2
滝ノ湯 御殿の湯 I	22.7	31.3	2.8	2.8	1,746	59.9	12.8	20.0	8.7		210.3	89.9
滝ノ湯 御殿の湯 II	22.7	26.1	2.8	2.8	1,305	62.0	13.2	19.2	8.2		177.0	90.5
滝ノ湯 温泉	23.4	19.5	3.8	3.9	528	80.6	30.1	19.0	9.4	21.11	132.2	142.0
明治温泉	22.5	24.2	3.8	3.8	680	80.5	16.5	22.3	13.2	11.86	172.8	98.6
横谷温泉	25.1	18.2	5.2	5.4	698	125.8	23.0	33.9	25.5	24.19	95.7	149.0